昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可
昭和四十八年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
（通第二八五号）

慈光

第二十五巻　第二号

目次

近角常観先生(二)……白井成允……(1)
愛別慰問の書簡……菅瀬芳英……(9)
安心小品抄……住田智見……(12)
招喚の勅命……山本晋道……(13)
念仏詩抄……木村無相……(18)
信味その折り〳〵……花田正夫……(21)

近角常観先生（二）

白井成光

近角先生は、其の御生涯を通じて唯だ一つ、先生の口癖の「如来のやるせないお慈悲」を説きあかしてくだされた。それをお説きくださる毎に、きまって二三の譬喩を用いられた。それらはいずれも如来のやるせないお慈悲をいただいておられる先生の信の内容をそのままに語りあらわすための最上の物語りであった。これを媒介として先生は、先生の信を語り、これを媒介として私共は先生の信を聞き味わう道を開かれた。（譬喩が宗教的または形而上的真理を伝える媒介として如何に重要なる意味を有するかは、仏陀の経典にもキリストの聖書にもプラトンの対話篇にも生き生きとこれが用いられているによっても知られるであろう）実に近角先生がこれらの譬喩を語られた時、それ等は先生の真実信心の流露であった。それを私は明治四十三年の暮から大正八年のはじめまで求道会館で繰返し承った。その同じ話を昭和七、八年頃、井上善右衛門兄が参詣した時も先生は語っておられた。しかも其日はじめて思いついて語るような新らしい喜悦にみちた御言葉をもって。だからこれらの譬喩は、先生の御生涯を通じてそれに生きておられた如来のやるせないお慈悲の言葉であったのである。

ただそれを親しく耳にした時から今はもう凡そ半世紀を経てしまい、ことに私の記憶力はこの頃著しく衰えてしまった。だからこれから筆に現われる所が何程まで先生の御言葉を伝え得るか、はなはだ覚束ない。願わくば、その真実を、概念的にでも、誤り述べることのないようにと念じながら、この筆を進める。

一、姨捨山の話

老いた親をば山に棄てる風習のまだ残っていた昔の話である。信濃国の姨捨山の麓に住む或る若い農夫が、その老いた母を山奥に棄てにいった話である。山路を辿り行くにつれて、若者の背に負われた老母はしきりに木々の小枝を折っては路に棄てている。若者はひそかに思うた、これは母がひとり山に残されるのを恐れてまた村に帰るための路

標としようとでも考えているのだろうかと。とうとう山奥に着いたので、若者は母親を背からおろして、別れを告げた。その時母親は云った、此処はもう山奥深く入ってしまったのだから、お前が家に帰るのにきっと路に迷って困るだろう。けれども今来た路々私が小枝を折って棄てておいたから、その小枝をたよりながら行けば迷うことなく家に帰れる、安全に帰りなさいやと。

この言葉を聞いて若者の心は崩れた。こちらは母を棄てているのに母はこちらをこんなに憂いているこんな母をどうして棄てられよう。若者は復び母を負うて山を降った。

奥山に枝折る栞（しおり）は誰がためぞ
親を棄てんといそぐ子のため　（古歌）

偏く知られているこの姨捨山の物語りを先生は繰返し語られた。如来のやるせないお慈悲を聞くことなく背いてばかりいる自分の姿と、こちらが如何に背いても、否、背けば背くほどいよいよ深くこちらを愍れみ護りくださる如来のお慈悲の有様と、又ひとたびその慈悲を聞いた暁には如来に随順する心がおのずからこちらに催されてくる趣きとこれら信心の深い消息をこの物語を通して先生は私共に告げて下された。

後年、足利浄円先生から承わったところによれば、曽てアインシュタイン博士がわが国に来られた時、博士は、日本の民衆の間に最も広く信ぜられている宗教について知りたいと云われた。それに応じて、結局、近角常観先生が博士に向って仏教を語られることになった。その時、先生はこの姨捨山の物語りを述べて、それにあらわれる親子一体の信心の味わいを伝えられた。涙をたたえながら聞いておられた博士は、帰国するに臨んで、日本人が是の如き温かい深い宗教を有することを上無き幸であるとし、此の信心の消息を聞いたことが日本に来て得た何にもまさるたまものであった、と語られたということである。西洋文化の欠陥に醒めておられた博士の心に、如来の一子地（いっしぢ）から流れ出た信心の風光が如何に深い驚きであり喜びであったか、これは私共の推測を越えることである。

二、大御心の譬

或る地に洪水がおこって住民は忽ち衣食住に窮するようになった。天皇陛下の侍従を遣わして慰問の品々を賜わった。その賜物をどうして戴いたらよろしかろうか。礼容を整えてでなければ、陛下に対して畏れ多いし、しかし整えることも出来ないし、どうしたらよろしかろうか。こんなふうに戴き様をいろいろ考えるけれども、これは陛下の大御心をすなおにいただいていないところに起こる迷いに過ぎない。大御心はこちらの窮した実際を痛ましく思召されてそれを救おうとの賜物である。その大御心をそのまま承

れば、礼容を整えることもできない穢れた身のままでありがたく戴くばかりである。この譬は次の譬と相通ずるものである。

三、放蕩児の譬

放蕩児があって酒色に溺れ、借財を負うてしまって、父の家に帰ることができない。父はこれを憂い、友に托してその借財をすべて支払い得る財を児に与え、直ちに家に帰ってくるように言い伝える。

父の言を伝えられ財を手にして児は思う、いくら借財しても父が支払ってくれるから大丈夫だ、何も顧慮せずいよいよ放蕩ができるぞと。この思いは誰も論外の沙汰と思うだろう。ところが或はこう思う児がある、自分が放蕩して父に心配をかけたのはたしかに悪かった、今父のお蔭で借財は済ましたけれども、このままで父のもとに帰っては面目が立たない、何か一仕事して手土産の一つでも整えてから帰ろうと。この児の思いは、如何にも殊勝げに見えるけれども、直ぐ帰れという父の意をすなをにいただいているものではない。身の程知らぬ驕慢の念に住して父の憂いを増さしめるばかりである。

この放蕩児の譬の中にはじめに挙げられた児が父の意に背く者であることは、誰もすぐにわかる。けれどもこの過に陥りがちな身であることを私共はいつも省みたい。

歎異抄にも

「そのかみ邪見におちたる人ありて、悪を造りたる者をたすけんという願にてましませばとて、わざとこのみて悪を造りて、往生の業とすべきよしを云いて、ようように悪しざまなることの聞こえ候いしとき、御消息に、薬あればとて毒を好むべからずと遊ばされて候うは、かの邪執をやめんがためなり」

とある、この邪執に立つ者の事である。これは明らかに省みられるが、これにくらべて、後に挙げられた児の場合の事が、或はすぐにはわからない。私共には如来のやるせないお慈悲をいただくのだと聞くと、いただく身はすぐ立派になるのだ、言行も善く美しくならなければならないのだと、何等かの功徳を彰わすことに眼を着ける。此の心も実は驕慢懈怠のわがはからいに他ならない。上に掲げた歎異抄の文にも、すぐ続けて

「またく悪は往生の障りたるべしとには非ず、持戒持律にてのみ本願を信ずべくば、われらいかでか生死を離るべきや」

とあり、又のちの章に

「口には（願力をたのみたてまつる）といいて、心には（さこそ悪人をたすけんという願不思議にましますというても、さすが善からん者をこそたすけたまわんず

れ）と思うほどに、願力を疑い、他力をたのみまいらする心欠けて、辺地の生を受けんこと、最もなげきおもいたまうべきことなり」

とある。上の姨捨山の子の信順の心と、此の放蕩児の我慢の意と、歎異抄のこれらの文を照らして、念仏の信心の消息を明らかにしてくださる。

四、跛（ちんば）の娘の譬

跛の娘がおった。いつも自分の姿を恥じ、自分をこんな姿にしてしまった母の過を恨んでいた。一日、学校から家に帰ったら、母が誰かと話していて、その話声が耳に入ってきた。それによって自分の跛であることを母が如何に悲しみ憂い悩んでおられるかを聞いてしまった。これ程までに思っていてくだされた母の真情を知らずに恨んでいたことの申訳けなさよ。母の真情に腹ふくれて娘の心は転じてしまった。

娘にとって自分の跛が直ったのではない、もとのままに跛であることに変りはないが、母を恨んでいた意が転じて母に信頼し感謝する念が生じてきた。このことが如来のやるせないお慈悲に気着いた心情の転換を語る要点なのである。（但しこの話については更に後に省みる所がある。）

此等の譬喩はいずれも、迷える子にそそがれる親の真実心をもって、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生を慈れみ救わんと誓いまします如来の願心を語りあらわそうとされたもので先生の念仏の信から不断に湧き出でたものである。

上に記した跛の娘の話を「如来のやるせないお慈悲に腹ふくれる」信心の譬喩として聞いた私は、其の後、島地大等先生のお宅の土曜会で、この話を私の解するままに語った。それによってであろうか、それから数日の後、島地先生は突然私に向って、前田慧雲和上をお訪ねしてお話を伺ってこいと仰言った。

何ために、何のお話を伺うのかをも明かされず、唯だ伺って来いと仰言った。私は何だかわけもわからず西片町の前田和上のお宅を訪れた。それは大正六年九月三十日の晩のことであった。（この月日は和上の日記によって記した）。その夜、深更まで、和上は静かに静かに私のために浄土真宗の根本義を語ってくだされた。（前田和上は、島地先生が師父の如くに仰ぎ慕い懐しんでおられた高僧であった。ただその時の御教の内容を記しておかなかったので今ほとんど全く忘れてしまって、此に筆することができない。けれども唯一つ忘れられず確かに遺り留まっている事があり、しかもその事がこの時の御教を一貫した中心の

こととして揺ぎなく今も聞こえてくる。それは即ち次の如くである。

親鸞聖人の教は浄土真宗と称ばれる。それは如来の本願から発ず浄土に往生せしめる教である。それは如来の本願から発起せられ成就せられる。煩悩に燃え罪業に狂う私共の有様をみそなわし、あわれみ、かなしみたまう如来のお慈悲が凝り固まって即ち浄土を建て現わし、私共を其処に往生せしめ、無漏清浄の徳を私共に恵み成らしめたまうのである。

如来の本願といい、やるせなきお慈悲という、その事実は究まるところ一にこれ私共をこの苦悩の境から救うて如来の浄土に往生せしめようとである。もし此の根本の御願を聞かないならば、たとい如来のやるせないお慈悲に腹ふくれると云っても、それは一時の感激に終り易く、真実に生死を超えしめる永遠の信であり得ないであろう。親鸞聖人のもうされる南無阿弥陀仏は、煩悩に燃えて三世に流転する私共を必ず救いて浄土の無漏のさとりに入らしめんとの、如来の慈悲の本願から成就せられた徳号であらせられる。念仏もうすにつけても、この如来の恩によって、三世流転の生死を離れ、浄土の正覚を期さしめられる幸慶に感謝しつつ日々の務めを尽くさせていただく、これ浄土真宗を聞く者の心得である。

（凡そこの如き教がその晩に前田和上から聞き得た所の要であったと今も想うのである。が但だ和上の深い信徳から流れ出た柔和な御語が、私の今の筆に移すと全く概念化されて固苦しいものとなってしまうのをいかんともすることができない）

この御教にしみじみと融け安らわしめられ、夜更けの路を静かな喜びの中に念仏もうしながら、私は中富坂の宿に帰った。そして前田和上と島地先生との御二人相図りて私の上に注いでくださる限り無き恩愛に泣いた。

こうして私は、私をかつて歎異抄にひきつけてくれた浄土の慈悲という言葉を、今は単なるあこがれとしてではなく、弥陀仏の本願力から恵まれ与えられる事実として、ありがたく味わわせていただくようになった。上に述べた跛の児の母親の慈愛は、これを感じた児にとっては、それだけですでに充ち足り、跛なるにつけてもいよいよ深く母の愛を味わい得るので、その跛が直らなければ母の愛が味わわれないなどということでないのは云うまでもないのであるが、それと同時に更に母親の心にたちいってみれば、その念願はどうかして児の足を健やかに直してやりたいという所に存するに違いないであろう。その如く、私共を浄土に往生せしめ円かに成仏せしめようという事こそまさしく如来の念願であらせられる、煩悩罪濁に苦しむ凡夫を哀愍したまう慈悲の本願の自然であらせられる。この本願力の

自然のおんはたらきに因りて私共は如来の浄土に往生させて頂くのである。今生には跛のままながらお慈悲に安らい、来生には健やかな足を得て自在に働かせていただくのである。此土にして正定聚の位に入り、彼土にして必ず大涅槃の境に至らしめられる、始終これ南無阿弥陀仏のおん恵み、不可思議の願力にたすけられまいらせるのである。

然るにそれから四、五年の間、私にはどうしても解けない謎のようなものが時々胸中に往来するにいたった。前田和上や島地先生がかくまで憂いてくださる浄土往生という事を近角先生は何故に語ってくださらないのであろうかという疑いであった。が、やがてその疑いの全く解かれる時が来た。

大正八年春、私は東京を去って名古屋に赴き、十年暮、名古屋から仙台に移った。その仙台に針生徳治郎という篤実の方がおられた。祖先以来お東の御門徒で別院の世話方をしておられた。

真面目に道を求めながら、常に易往而無人の聖語を己れに当てて省み、自分はその無の方に入る者ではないかと歎いておられたが、たまたま直腸癌の手術を受け、余命いくばくもなしとさとりて後、終に他力廻向の信に徹して易往の念仏を喜ばれるにいたった。

平生から近角先生を慕っておられたので、先生が仙台求道会に参られる時を待ちに待って最後の御法話をお聞かせにあずかりたいと請われた。

私は先生のお伴をしてその病室に参り御法話の席に侍らせて頂いた。聞く針生さんも、語らるる先生も、これを最後という悲痛な境地におられた。私は初めお伴のつもり、傍聴のつもりでいたのであったが、いつのまにか先生のお言葉に引入れられてしまって、一語一語、深い感激のうちに聞き終ってしまった。それは凡そどのくらいの間であったのか、サッパリわからない。ただ夢中になって聞き終った時、私は真に私のためにこの御法話がなされたのであることを覚えた。

その時の先生の御法話は始から終まで唯だ一筋に如来の浄土を告げてくだされた。——浄土の二十九種の荘厳、何一つとして法蔵菩薩の願力の成せる所ならざるはない。私共有情の罪濁に苦悩する姿をみそなわし、哀れみ救わずにはおかじと同悲したまう御誓いこそ、遂に浄土を建立し荘厳せられたのである。

其処なる花も鳥も樹も草も池も水も宮殿も楼閣も、一にこれ私共の罪濁を清め苦悩を救わんとのやるせなきお慈悲の顕現ならざるものはない。如来かねてより私共の煩悩熾盛、罪悪深重、いつもいつも苦悩に流転する様をみそなわし、必ずこれを救いて無漏清浄の身とならしめんとて、五

劫に思惟し、永劫に修行し、功を積み徳をかさね、彼の浄土を建立し荘厳して私共を招き呼びたまう。

そのやるせなきお慈悲をよくよく聞きまつる時、罪深ければこそ、悪重ければこそ、いよいよ往生の望み確かなのである。まことに「久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里は捨て難く、未だ生まれざる安養の浄土は恋しからず候こと、まことによくよく煩悩の興盛に候にこそ、名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力無くして終る時に彼土へはまいるべきなり、急ぎまいりたき心無き者をことに憐みたまうなり」このやるせなきお慈悲の凝り固まりて成れる処であればこそ、お慈悲に腹ふくれたらたちどころに往生は自然なのである。――それはこうして筆を執っている今（昭和十六年）からもう凡そ二十余年も昔の事であった。私は今は先生のお言葉を一語も記憶してはいない。けれどもその時の深い感銘は、これを憶い起こすとき、私の心の中にほぼ此の如き思いを浮び出でしめるのである。

これによって私は近角先生から親しく浄土を告げられたそれは然し先生が不断に繰返し〳〵お告げくださる如来の本願と全く同じものである。煩悩の私共を愍みたまうやるせなきお慈悲の凝り固まりて成就したる処である。お慈悲の外に浄土があるのではない、お慈悲を聞きさえすれば浄土の往生は自然なのである。先生が平常みだりに浄土を説かれないのは、私共が先後を顚倒してしまって真実にお慈悲をいただくことが出来ず、真実の報土に往生することが出来なくなるのを憂いたまうたからであろう。

「極楽はたのしむときいてまいらんと願う人は仏に成らず、弥陀をたのむ人は仏に成る」という蓮如上人の教もある。浄土に往生するのだと先に頭に入れてしまうと念仏は其処へ行くための手段になってしまう。如来の本願も私の快楽のための用具に使われてしまう、信仰も功利に過ぎなくなってしまう。これ恐れても恐るべき一大事である。先生は私共の信をあくまでも純浄ならしめ真実に徹せしめんと憂いてくだされた、その深い御親切から妄りに浄土を語られなかったのであろうか。

もとより先生御自身にあっては、弥陀の本願を信じて念仏もうされるところ、浄土の往生は自然法爾（じねんほうに）の事として深く味わっておられたに違いないであろう。私は先生のこの御態度を思う毎に、歎異抄の、

「親鸞におきては、ただ念仏して弥陀にたすけられまいらすべしと、よきひとの仰せをこうむりて信ずるほかに別の子細なきなり。念仏はまことに浄土に生まるるたねにてやはんべらん、また地獄におつべき業にてやはんべるらん総じてもて存知せざるなり。たとい法然上人にすかされまいらせて念仏して地獄におちたりとも更に後悔すべからず

候云々」という御語を憶い出さざるを得ない。この純無雑なる信心に住し、ただ一向にその心境をお伝えくださる以外に何もなかったことと窺うべきであろうか。而してこの純粋なる信の一念の中にこそ真実に自然に浄土の往生は証されておられた事であろう。この事は先生の著わされた『親鸞聖人の信仰』や『慈光録』等を通しても明らかにうかがわれる事である。

これによって私の数年にわたる何となき疑問は解かれたまことに弥陀の本願を聞いて念仏もうすところ、浄土往生の信確かにして、随って浄土の慈悲という事さえ問題とならなくなってしまうところ、年令の加わると共に造罪積悪いよいよ深重なるままに地獄に堕つる他なき身が、ただこの如来の本願のやる瀬なき御仰せに安んぜられまいらするばかりである。（以上は昭和十六年の日記による）

近角先生の御生涯を思うと、先生の口癖の「如来のやるせないお慈悲」がそのまま人間となって生きて働いていたという感じがする。阿闍世王が如来の慈悲を聞いて蘇った時に歓び躍って讃えた詩の中に、

「世尊大慈悲は、衆のために苦行を修めたまうこと、人の鬼魅に著かれて狂い乱れて為す所多きが如し」

とある句が、先生のお姿と共に想い出される。先生が仏陀の理想を身に証そうと努めておられた途中、はからずも一人の友にも親切を尽くしきれない自分を見出して心身挙げて煩悶し懊悩するに至り、病院からの帰途、人力車の上で夕陽に照る西天を眺めて心開け、かかるあさましき身をお見捨てなき如来のお慈悲に醒められたという時から、求道学舎を中心に祖聖の教を獅子吼せられた長年にわたる御活動を経て無数の人々に安立の地を開かれ、或は国会に宗教法案の議せられた際、或は宗門に不祥事のおこった際、真に狂い乱るる如く身を捨てて国家と宗門との前途を憂い救うに奔走せられた御跡は、日本精神史の上に不朽の意義を印したことであった。ただ御晩年、脳溢血に侵されて臥し、法案のこと必ずしも御志に合わざるあり、あまつさえ令息の戦場に華と散らるるに遭わるる等、他よりしてこれを窺えば、御胸裡いかばかりか寂寥の感に迫られたまうたことであろうかと涙を催さしめられる。宗門の事のあった日から新に刊行し続けられた『信界建現』の筆をも、令息釈文常居士を追憶せられた文を終として絶っておられる。而も実に世間虚仮にして唯仏是真なり、念仏成仏是真宗なり。平生の如く莞爾として浄土に還られた先生は復た永遠に度生の歩みを運んでおられるであろう。

（聞法録より）

愛別慰問の書簡

菅瀬芳英

拝復、不忘様には正覚化生の身となり、四年を一期として此世を去り給いし趣き、驚き入り申候。

人生の無常はかねて覚悟はいたし居り候えども、今更の如く感じ入り申候。御寺内御一同様さだめて御愁痛のことお察し申上げ候。南無阿弥陀仏々々々々々々。

流転三界中　恩愛断つ能わず、
恩を棄て無為に入る　これ真実の報恩なり
南無阿弥陀仏、々々々々々々

人生のつねの凡情の上よりは恩愛の涙は禁じ得るものに非ず、泣いて泣きつくし、涙のかわくまで泣くより外御座なく候。仏様の善巧方便もあんまりひどい、ただ仏様をも怨むより外御座なく候ような気も起り候が、然しその中より凡情は凡情とし、

衆生の貪瞋煩悩中に能く清浄願往生心を生ず

がおこり申し候、悲しみは転じて慶びとなり、永久の別れに非ずして浄土に再会の期をたのしみ申し候。

いよいよ不忘の名の如く、四歳を一期として夢の如くこの世を去るとは如何に忘れようと思うとも忘れることは出来ない、唯この方便を無にせない様、益々いのち長きしるしには御報謝を怠らないよういたさねばなり申さず候。南無阿弥陀仏、々々々々々々、々々々々々々、こうお念仏を相続いたし候えども、その中より残念なことをした、両親の心はどのようにあろうか、御老婆の心はどのようにあろうか、門徒も残念に思うだろう、何という悲惨のことであろうと思うと、また凡情として涙も出る悲しくもある、悲喜こもごも起るので、やはり安養の浄土に到るまでは、此世の人情は到底断尽することは出来ないけれども、その中より摂取不捨の誓願空しからず、永劫の迷夢より醒め浄土往生を期し候事何より嬉しく、永久の別れに非ず候と思えば、ただちにお念仏になり申し候、南無阿弥陀仏々々々々々。先ずは取りあえず書中を以て御悔み申上げ候

四月四日（大正六年）　敬具

飛鳥貫徹　様
奥　様
老母　様

恩愛はなはだたちがたく　生死はなはだつきがたし
念仏三昧行じてぞ　罪障を滅し度脱せし
生死の苦海ほとりなし　久しく沈める我等をば
弥陀弘誓の船のみぞ　のせて必ずわたしける
南無阿弥陀仏、々々々々々々

○

四苦八苦とは経の中に説いてあって、その中の愛別離苦ということはこのたび身に沁んで感じられたことである。このようにつらい思いをせねばならぬなれば、親子の縁を結ばねばよかったのである、今となりて考えて見れば親子の縁を結んだのを怨めしく思うようになってくるのである。なぜ生れたのであろう、なぜ死んでくれたのであろう、思えば思うほど、考えれば考えるほど愚痴が起りて、どうしても思いあきらめることは出来ない。思うまいと思えば思うほど思いがむら〳〵むら〳〵起ってくるのでる。

平生より法を聞いておるのであるから、この様な気の弱いことではならないと、幾度も思い返そうとりきんでも、駄目である。こうなると泣くより別に道がない、これが泣かずに居られようか。どうしても心が承知しない、唯無意識的に涙が出て、泣くより外にみちはない、一夜も二夜も泣きあかし、三晩も四晩も泣き、夜もひるも泣きどおし、いっそ泣いて泣いて泣き続けたいものである。

ここに到って思い起し気づかして貰うのが大悲の親様である。御元（おんもと）が子供のために泣いたよりもなおなお長く泣いて御座るのが大悲の親様である。我等のために久遠劫来より泣きずめが親様であったのである。こんどのことで愛別離苦の幾分の事を知らして貰うたのであるが大悲の親様は、自分の身に早くよりお知り遊ばし、自分のつらい思いより四苦八苦の迷いの中に沈んでいるのを御覧遊ばして慈悲を垂れて下されたのが大悲の親様である。私共が苦しんでいるとき、一緒に苦しみ、私共が泣くとき一緒に泣いて下さり、私共が慶ぶとき一緒に慶んで下さるのが大悲の親様である。南無阿弥陀仏々々々々々。

先日あるところの奥様が子供を亡くせられて非常に落胆して居られて日々愚痴をこぼしては泣いておられたのである。その家は神道であって、奥様の里は禅宗であるから、宗教というような考えは微塵も無いのであるから余程困難して居られたのである、ところがその人の友人に法を聞いて居る人があって、宗教を聞いたらよかろうと云うことから、其人の宅にまいり法話をしたのである。

ところがはじめてのことであるから話すことが随分むつ

かしかったが、前に書いてある様な、泣いて泣いて泣きつくしなさい、その泣いたときの思いの上に、このように泣いている自分より長く長く泣いて居て下されたのが大悲の親であると話したら、非常にそのことが胸にはまり、如来大悲の親様に気づかれたのである。

わたくしは宗教を聞いたらあきらめよ、思うな、愚痴をこぼすな、忘れよと云われることであろうと思うて、余程覚悟しておりました。あまり子供に別れたのがつらいので充分に決心しておりましたのに、そんな決心も覚悟もいらないので、親様自身も同情に泣いて、わたしが泣いて居るよりもなお〳〵泣いて下さるのが大悲の親様であると聞き、真実の同情者はこの世の中には大悲の親様であると気づかして貰うて、はじめて胸が晴れたようであると話されたのである。南無阿弥陀仏々々々々、南無阿弥陀仏々々。

ただただこの上は御恩の称名より外に要のないことにさせて貰うたのである。南無阿弥陀仏々々々々々々

仏かねてしろしめして、煩悩具足の凡夫と仰せられたることなれば、他力の悲願はかくのごときのわれらがためなりけりとしられていよいよ頼もしく覚ゆるなりとある。われらどもの迷夢中にあって苦しんでいる煩悩具足を御承知遊ばしての上の大慈悲がありがたい。

われらどもの往生は仏様の方よりお定め下されたのである。迷いの中にありながら迷いを知らないもの、種々なことに出遇わして貰い、如来様の慈悲に気づいたのである。

人生種々のことにつきあたって、それが身にこたえ、終に如来の真実がわが身に引き受けられることになったのである。「不可思議の願力として仏のかたより往生は治定せしめたまう」とある、仏のかたより自分の往生をきめて下されたのである。向うがさきにきまったから、疑い深いこのものがあなたにおまかせすることが出来たのである。

「如来わが往生をさだめたまいし」と蓮如上人がおよろこびなされている。如来わが往生をとのお言葉が真に力強い、南無阿弥陀仏々々々々々。親様の大慈大悲がありがたい。ただこの上は南無阿弥陀仏々々々々々、々々々々々。

五月一日（大正六年）

飛鳥一二美　様

安心小品

住田智見

平泉徳城師曰く

「木曽川の堤を行けば木曽山へ行く。南無阿弥陀仏を称うれば浄土へ行く」

○

一蓮院秀存師曰く

「長々仏法の話をしたが何も覚えて帰るでないぞ。南無阿弥陀仏一つで助かるということだけは、同行にも子孫の末までも忘れぬように申し伝えておいておくれ！」

○

香樹院師曰く

「世間で大晦日を大切にするように臨終のことを大事にするのが当り前であるのに、わが御開山様はその臨終の御沙汰はなく平生の時信心を得よと仰せられたが、尊いことではないか」

又曰く

「お前がた何と思うて居るか。南無阿弥陀仏、々々々々々々と申すは、お母さん〳〵ということである」

○

七里恒順師曰く

「石はたとい小なりとも沈むべき性質のものなれば、大海に投ずればその底まで沈む。船は何程大なりとも水上に浮んで自由に航行し、重荷を乗せて彼岸に運送す。今我等、罪業深重の身、生死の大海に沈むべき筈なのに弘誓の船で生死の苦海ほとりなきも、乗せて必ず渡しけるで、小石さえ沈むのに、岩より重い罪業の身がやすやすと涅槃の岸に到達出来るのは全く弘誓の力である」

○

明信寺曰く

「人はみな仏の心を知ろうとあせっているが、仏がすでに昔よりわが心を知りたまうことを知らぬ」

照らしみるほとけいますと知るならば
ただ朝夕にうれしはずかし

○

讃岐の庄松同行曰く

「人はみな他力々々というけれど、わしは阿弥陀様の自力がありがたい」

招喚の勅命

山本晋道

南無阿弥陀仏とは、阿弥陀仏に南無せよとの、仏の私へのお喚び声である。「我をたのめ、必ず救う」のお喚び声である。やるせないお心から、切々として、如来はかく私を喚び続けて下さるのである。

然るに私共は、大悲招喚のこの勅命を、おろそかに、ぼんやりと聞いている。そして心からこれを感謝し、如来によりすがる思いがない。ここに問題がある。何故私共にはこの如来のお心が、お心の如く頂けないのであろうか。

○

この問題は二つの方面から考えねばならぬようである。一つは喚びかけられている「私」とは如何なるものであろうかということである。他の一つは喚びかけておられる如来の願とは如何なるものであるか、そして、如何なる力で如何にして、如何なる境涯に私を救わんとしていられるかということである。

そして、この二つは別々の問題でなくて、救われねばならぬあわれな私あっての如来の願と行（ぎょう）であるから、如来の願は実はそのまま私の願うべき願であり、如来の行は、その真実の願を成就するために私の行ずべき行を、如来が代って行いたもうて下されてあるのである。

だから、み光に照らされて私の迷いの相を信知せしめられるとき、はじめて如来の願行がこの迷いの私のためであったと聞かされることがこよなくよろこばれるのである。わがためであった如来の願行を聞くことによって、わが迷いの相もわかり、み光にはぐくまれて、わが迷いの相を知ることによって如来の願行はわれ一人のためであったと聞き開かせて頂けることである。

○

そこで、喚（よ）びかけられている私とは如何なる「私」であろうか。

仏光に照育せられることなくしてはこの「喚ばれている私」はなかなかはっきりせぬものである。然し仏のお光の

中にお育て頂くと、何時しか宿縁が熟して、この「喚ばれている私」にめざめさせられる。この「私」は、深い迷いの中にあって、迷うていることすら知らぬあわれな流浪の旅人である。深い闇の中にあって、はかない夢のみ見続けて、未だかってパッチリと眼をあけて迷いの旅の恐ろしさを見ず、悟りの世界の尊さをも知らぬ奴である。

○

迷いの中にあるとは、魂の眼がつぶれていて如実に見、如法（にょほう）に生きる力を失っているということである。眼が見えぬ、見えても如実に見えぬ、歪（ひず）んで見える、さかさまに見える。或は夢や幻が見えて、これを追うて行くのである。近視であり、乱視であり、幻視であり、時には全く見えぬのである。

それでいて、見えなくてもいい他人の欠点や過ちは見えすぎるほど見えるかと思うと、大きい御恩や、わが身のあさましい姿等は、なかなか見えぬような眼である。ありがたいとよろこばねばならぬようなことが、あたりまえに見え、あたりまえだと思っているのが、いつしか不平不足に見えてくるような眼なのである。

○

こんなめくらの私であるから、執着してならぬものに執着してまちがいばかり起こしている。無明（愚痴）なるが故に、渇愛（かつあい）にあえいでいるのである。盲目的な欲情は骨の髄までしみついていて、つかんでもつかんでも満たされるということはない。ますます渇愛の度が強くなり、あさましい欲に狂いまわる。餓鬼の相は、遠い所をさがさなくても見直せば私の相がそれである。

○

思うようになればなったで、いよいよ迷いの夢が深くなって、貪欲の心が増長する。ままにならねばならぬで忽ち恐ろしい瞋恚の焔を燃やす。上品ぶって、如何にも出来あがった人間のように装っていても、一度自分の痛い所にさわられると、忽ち正体を出して鬼のような顔をする。地獄の焔の中に住むにふさわしい鬼とは他人ごとではなさそうにある。

○

仏様から喚ばれている「私」とはかかる私である。深い心の闇の中にあって、顚倒妄想にひきずられて、狂いまわっている「私」なのである。これを仏は、惑・業・苦と仰せられた。惑は無明、心の闇であり、業とは闇に迷う私の狂うてまわる動き方であり、苦とはかかる動き方をするものの心の中にみのる果である。

迷いとはこの惑・業・苦のことである。迷いを原因から云えば惑（無明）、経過、動き方から言えば悪業、結果か

ら云えば常に不平、不満、焦燥、動揺、不安、倦怠、苦痛しかして最後には死滅である。

それでいて、本人はこの惑を知らず、悪業をさらしていると思わず、従って苦悩を招くようなことをした覚えはないと、苦悩の中にあって、世をのろい、人をのろう。これがそのままいよいよ深い惑いの相である。惑うが故に悪業をさらし、悪業を続ける故に苦悩を招く。苦しきが故にいよいよ惑うてなすところをあやまり、その結果として苦しみをます。どこまでも果てしのない惑業苦の輪廻流転で出ずる時がない。

これが迷える「私」のありのままの相である。

今までこうして迷うて来た。今もこうして迷うている。これから先もこうした迷いは続いて行く。人生五十年百年の今生の過去と現在と将来がこの通りである如く、これを三世に押しすすめて考える時、曠劫よりこの方こうして迷うてきたのであり、尽未来際（じんみらいさい）まではてしなくこうした迷いを続けて行く私であろう。

現前のこの私の闇の深さと、罪業深重の動き方と、はてしない苦悩の果を知るとき、生死の苦悔ほとりなく、久しく沈めるわが身であったことがほのかに知られることである。

○

善導大師は、仏日に照らされてこの「自身」を発見した人であった。この恐るべき「自身」を知られ、現前のこの喚びかけられている「自身」にめざめ、このおごそかなる現実相に立って、過去をふりかえり、行手を望み見る時、善導の機の深信がはじめて私のものと味わわれる。

「自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」

しかしてかかる善導大師の機の深信は、同時に、

「彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂取したまう。疑い無く慮り無く彼の願力に乗ずれば、定んで往生することを得」

という金剛の如き法の深信に裏づけられて離れることのないのは注意すべきことである。

○

親鸞聖人が「愚禿」と大地にひざまづかれた御心地、虚仮の行、雑毒の善より外は行じ得ぬ迷い深い私であるというめざめ、ここに大悲招喚のお目当である私がある。

○

けれども私共はなかなかこの迷い深い「自身」に気がつかぬ。生死の苦海の中に沈没している自分であるような心地がせぬ。だから如来より救って頂かねばならぬ私であると思われぬ。本能の満足を追うに私共は忙しい。金である

家である、愛欲である、名利である。私共はこれをつかんだら落ちつけるとおもっているので、日々夜々、これを追うのに忙しい。幸福はこの方向にあると皆思いかためているからである。

だが、これは危いことである。本能に生きる人間というものに取っては、これなくては落着けぬのは本当であると共に、これらだけをいくら集めてみても、それで人間に本当の幸福が来るものではない。この世にある幸せにまどかな幸せはないからである。移り変らぬ幸せは無いからである、内に苦しみの因をともなわぬ幸せはないからである。

貪しい人にも問題はあり、富める人にも問題はある。樹木低ければ陽あたらず、高ければ風当りが強い。人の地位についても同じである。又、一人者はさみしいし、夫婦者にも悩みはある。所栓生死の苦海に真の幸せはない。悪人にも苦悩があり、善人にも問題はある。真面目な人ほど悩みは深いとさえ言い得られる。けだし、福をよろこぶ心の深さそのままが、災を悲しむ心の深さであり、善を見る眼の鋭さこそ、悪を見出して悩む心の鋭さである。

だから、浅薄に生きている人々には、一寸見れば悩みがなくて、宗教等は不必要でもあるかの如く思われるけれども、一歩深く突きこんで考えて見ればまどかな幸福を得ている人は一人もない。我若し悩みなしと云う人があれば

それは悩みがないのでなくて、悩みを感じ得ぬ程深い眠りの中にいるので、最も深い迷いの底にその人は沈んでいるのである。

○

万人はこのように、危い幸せをつかんで、それに落ちつこうとしている。不完全な善を完全と思いこもうとつとめている。けれどもそれは遂に許されることではない。何となれば、惑業苦の迷いの世界には、生死の苦海そとめざめなければならぬような苦の果が次々と結んでくるからである。

○

この苦をかかえて、縁あって、仏法に触れて来た人は幸せな人である。この苦が私の迷いの相であるぞと聞かされるからである。この「迷える私」がほのかに味わわれ始める時、私共ははじめて「喚ばれている私」の幸せを味わいはじめる。

この迷い行く私が、喚ばれている私なのである。端的に言えば、私が迷いはじめし初一歩が、仏が私を追うて動きはじめた初一歩であったのである。迷い行くこの私が、はじめから終りまで、仏のお胸を痛めたてまつった因であったのである。この迷い行く私を悟りへ導かんがための仏の願であり行であったのである。かくて願行成就の仏ましま

すとは、私が救われるお力があるということである。仏が願行成就したまえりとは、私が生死を出ずる道が成就せられたと言うことである。

○

かくて今正覚を成じ給う仏は、今も尚流転の旅を続けて深い眠りの中にある私を、誓願の御名において切々と喚びたまう。

「早く覚めよ、そのままでは危いぞ。
我にたよれ、我が名を称えよ、必ず救うぞ」と。

○

眠り深しとはいうものの、私共は今こそ静かにこの招喚の勅命に耳傾け、久遠の迷いを知らしめて頂きたいものである。出離生死の一大事に目ざめさせて頂きたいものである。

一蓮院秀存師「法話」

自らつくづく思うに「私一人」の語まことに味わいあり。五劫永劫の御苦労、私一人がためなり、御浄土を建立し給うも私一人がためなり。私は、私一人をひとり子の如く思うて下さる大悲のおまことを今日から死ぬるまで喜びたいことなり。阿弥陀様もこの秀存を一人子の如く思召して下さるる。私も阿弥陀様を唯一人の親の如く思うべきなり。

「一子のごとく憐念す！」の御語、あらありがたやうれしや、かたじけなや。私一人ということを忘れぬようにしてくれよ、わがこころ。

「一人たりとも」という一人は私のことと思えと人に対しては云いたりしにあらずや。それになぜ、我心よ、さは思わざりしぞ。しかし、私一人と思うたらさみしかろうがさみしからず思うてくれよ、わがこころ。

○南無阿弥陀仏を称うれば、十方無量の諸仏は
百重千重囲繞して、よろこびまもりたまうなり
○煩悩にまなこさえられて、摂取の光明みざれども
大悲ものうきことなくて　つねに我身をてらすなり

ありがたや、一人子を一人で置きたまわぬが親のお慈悲である。

念仏詩抄

木村無相

ご面会

オヤに遇いたきや
ナムアミダ仏
この身このまま
ナムアミダ仏

もうすまんまが
ご面会
ナムアミダ仏
ナムアミダ仏

これだけ

池山栄吉先生
つねの仰せに
〃ナムアミダ仏——
これだけだよ
これだけしかないんだよ

これだけていいんだよ〃

フシギ

わたしの奥の
貪瞋煩悩の中に
お念仏がきこえる
お念仏がきこえる
〃常於大衆中
説法師子吼〃

フシギの中の
フシギなり
フシギの中の
フシギなり

法蔵さま

涙には
涙にやどるほとけあり

そのみ仏を法蔵という

六字はなれて

弥陀の名号
となえつつ
名号の弥陀に
遇（あ）えよかし

六字はなれて
親は無し
ナムアミダ仏
ナムアミダ仏

聞いたか

無相聞いたか
ご信心さまのお声

ナンマンダ仏は
ご信心さまのお声

あ　あ

ああ
本願は名号を体と為し
ああ
名号は本願を宗と為す

ああ
本願や名号
名号や本願

弥陀の名願
信ずべし
弥陀の尊号
称うべし

阿修羅の琴の音

ああ聞こゆるは
阿修羅の琴の音
わが悩みの日に
わが迷いの日に
わが苦しみの日に
わが悲しみの日に
ああ聞こゆるは
阿修羅の琴の音
み仏なる
み名の調べ——

ああ　妙なるや

阿修羅の琴の音
黙って——
黙って——
黙って——
人間の言葉はいらぬ
ああ　妙なるは
阿修羅の琴の音
み仏なる
み名の調べ——

ああ相会わん

——お盆に——

西方は
父いますみ国
西方は
母いますみ国
西方は
親しきものの
往きませるみ国

ああ　相会わん
ただ一つの道にて
ナムアミダブツなる

ただ一つの道にて

良寛さま（一）

良寛さまの
おん歌に

〃愚かなる
身こそなかなか
うれしけれ
弥陀の誓いに
あうとおもえば〃

良寛さま（二）

——御墓前にて——

さくら散る散る
良寛さまの
おん墓に——

聞くばっかり
聞くばっかり
聞くばっかり
聞くばっかり
ナムアミダブツと
聞くばっかり

（四十七年九月十日）

信味その折り折り

花田正夫

わくに入らぬ繪

何年か前のことであるが、ある人から「わくに入らぬ絵がほしい、最近の絵はみなわくにはまってしまっているのにうんざりさせられる」ということを聞いた。

わくにも色々あると思う、美術の世界でも、学問や政治や思想の世界にもそれぞれわくがあるが、それを詮じつめると、時間と空間のわくが最後にのこる。この最後のものを超えたものが私共のふれ得る最上のものと思う。

それにつけても、聖徳太子が憲法第二に

「四生の衆帰、万国の極宗なり。いずれの世いずれの人かこの法を貴ばざらん」

と言われているのに括目（かつもく）させられる。無上正遍道としての真実の大法は、いきとしいける者はそれによってはじめて安んじ、国という国はそのこころにそむく時亡びる。そして時代がどう移り変ろうとも微塵のゆるぎなく、民族や国境をことにしても、また老小善悪のひとをえらばず、万人が日々にあらたに味わい、ひとしく貴ぶ大道を掲げられている。

思うにあらゆるものは時に制約せられ、所に限定されていわゆる「わく」を越えることが出来ない世にあって、無碍自在の大道がスラスラと述べられているのに驚く。

仏道に開眼せられた三十前後の太子、この憲法を発布せられた時、永遠に曇ることのない、世界のはてばてまでもいたらぬくまなく照らす光明を仰がれて、どんなにか踊躍歓喜せられたことであろうか。

私自身、太子の勝鬘・維摩・法華の三経の信味を頂き、十七憲法をひもとかせていただくにつけ、千三百年を経ても、太子の仰せがそのまま私共の心を言いあてられていて否むことの出来ないものを感得するについて、太子の仰せのもつ真実さにうたれるのである。

さらに私は歎異抄にあらわれた親鸞聖人の御言葉も、七百年前のものとは思えない、いきいきとかがやき、私も仰言る通りですと自然にうなづかされる。さびの来ない金の言葉、いのちのかよう実語にふれるにつけても、ここに「わくに入らぬいのち」の尊さを仰ぐのである。

うろこが肌

池山先生がある日、

道成寺うろこが肌のぬぎじまい

の一句を引用されて、清姫が恋のはてに安珍をのろい、蛇体をあらわして焔を吹きかけた説話を述べられてから

「自分の心にうろこがはえていることに気づかぬ者には歎異抄は読めないだろう」

と云われたことがある。

さて、うぬぼれの強い私共は、何か自分にたのみとするものを持たないと淋しくてやりきれない、それが崩れかかると卑屈になってへこたれる。だから自分がうろこのはえた蛇蝎（へび・さそり）の身などとは思えない、たとえそうした心が出ても、その責任は相手にあるので、自分はそんなものではないと思いかためる。

しかしダイヤとガラスと打ち合う時ダイヤはすこしも傷つかないが、共にガラス同士で打ち合うと、互に砕けてしまう。このように自分が真に立派であれば相手の出方の如何によって傷つきはしないはずなのに、相手の言動で立腹し罵詈するのは共に駄目な者同士である証拠である。そういう縁にふれると駄目な自分の素地（きぢ）が曝露して、うろこの肌が見えるのである。

平和な時は人間らしい顔をしているが、いざとなるとうろこのはえた身がとび出す、これが自分の心の奥にひそむ実体だったと知らされる時、罪悪深重、煩悩熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします、との仰せは、こうした私のためであった、他力の悲願はかくの如きのわれらがためであった、こうしたうろこの肌をかねてしろしめされての大悲大願であると渇仰申すことである。

ここで私共がよくつまづくのは、現に自分の心にうろこがはえているが、このままではいくまい、念仏申し、聴聞しているとすこしはよくなれようと、未来の善に望みをかける。そこに何時も、こまった、こまったというなげきが繰り返される。

西欧の俚諺に「地獄への道は理想の花で飾られている」とある。私共は未来の自分を理想で美化して、その虹を追うているが、理想は飽くまで理想で現実ではない、幻滅また幻滅の悲哀をくりかえしながら性こりもなくその道を歩みつづける。恰もそれは、岩に顔をブッツケて血まみれになりながらその道の駄目さに気付けない悲惨さである。

そこに、先覚者、先達があらわれて、そこは自分も通っ

た道で不可能なのだ、努力次第で出来るというようなものではない、人間の力の限界なのだ！と教えて下され、このことをかねてしろしめしてさしのべて下さる御手、南無阿弥陀仏の願船まします、と導いて下さるのである。

歎異抄の序文に「幸に有縁の知識によらずんばいかでか易行の一門に入ることをえんや」とあり、聖人の和讃に

　　曠劫多生のあいだにも　出離の強縁しらざりき
　　本師源空いまさずば　このたびむなしくすぎなまし

と、よきひとにめぐり遇えたことをおよろこびになっている。

近角常音先生はいつも兄君常観先生をよき人としてお喜びであったが、常音先生が三十近くまで聞法し続けられてもどうしても駄目で、出来た信心も次々と崩れるという始末であった時、或日嫂のきそ子夫人が茶のみ話に

「弟を子供の時からそだててきたが、そのことに別に不足はなけれども、あいつが我慢のやまぬのにはこまったものじゃ、可哀相なものじゃ」

と常観先生がいつも愚痴のように云っていられると聞かれてビックリされたのである。

「自分は信仰がわからぬ身だから兄の言うなりに従ってきたのに、我慢がやまぬなどとは心外である」

というように一時は面白くなくなったが、そのまま散歩しておられるうちに、

「物の値段は買手がつけるもので、自分の値段も兄がつけたので、これはどうすることも出来ぬが、この我慢のやまぬと見てとると大抵は、もう出て行けとなるのに、こまったものじゃ、可哀相なものじゃと、懇意な人に愚痴をこぼしている、よくよく心にかけてくれればこそである！」

と思いつかれた時、この我慢のやまぬのが可哀相という心はそのまま、聖人の心であり仏のおまことであると気付かれて心ひらけたのである。

こうして「世には不思議なものもあるものじゃ、我慢のやまぬのが可哀相、と云ってくれるとは」とよろこばれると共に「今まで自分は兄によくしていると思っていたことが我慢であった！」と気づかれたのである。そうしたことから先生は「自己を掘りさげると世間によく云うが、そういうことは出来るものではない。現に我慢のかたまりの身でありながら自分ではよくしているとしか思えぬのだから。ただ一つ、仏のおまことに遇うてのちに、本当の我慢のかたまりであったと気付かされるだけである」とよく云われた。

愚者でありながらそうとは思えず、悪人でありながら善人としか思えぬ、どうにもならぬ身なのにどうにかなれよ

うとしか思われぬ私共を、仏は知り尽くされて何処々々まで迷れんで下さる、その思召しにふれて、成る程、愚者でありました、悪人でありました、地獄は一定でしたと自然に知らされるのである。

さとりのまえのえにし

旧臘信友のAさんとお別れした。Aさんは停年になるまで教育界におられ、それからは聞法と晴耕雨読の生活をしていられたが癌疾で遂に往生せられたのである。

幸に亡くなられる数日前に枕頭にお見舞い申し、さしのべられる手を握ってお別れを惜しんだことであるが、今生は夢のうちのちぎりで必ず別れねばならぬが、唯一つお念仏で結ばれた手だけは、来生さとりのまえのえにしとつながり、やがて「倶会一処」の別れることのない世界への扉がひらかれる。

私はどちらかと云えば、倶会一処というような仏語をも軽く聞き流しすぎて、御座なりの言葉のようにしていたが今度という今度は、法友の浄土にかえられる尊い姿に接して、地上のつながりがいかにもはかないことを知らされ、念仏の御縁のたしかさ、たのもしさに心うたれた。

博多の七里和上の逸話に、或青年が

「浄土は本当にありますか？」

とおききした時、和上は

「この世に本当のものがあるか。この世がたしかに思えている間は浄土は夢のように思えるが、この世が真に何一つたよるもののない幻影であったと知らされる時、浄土は厳然としてあらわれてくださる云々」

というようなお答えをされたと覚えている。これにつけても私の京都の聖護寮時代に、色々お世話になった治田久さんが胃癌で亡くなられる直前に、夕べの勤行のあとで寮生みんなが病床をお見舞いした。治田さんはしげしげと一人一人を見廻されて、やがて念仏裡に

「みんな夢です、いまに消えてしまいます」

とつぶやかれながらきよらかなほほ笑みをたたえていられた。嗚この治田さんの前に、仏界、浄土がありありとあらわれているんだなあと、思わず合掌せしめられた。

唯信抄の末文に

「今生ゆめのうちの契りをしるべとして、来生さとりのまえのえにしを結ばんとなり。われおくれなば人に導かれ、われ先立たば人を導かん。生々に善友（ぜんう）となりてたがいに仏道を修せしめ、世々に知識としてともに迷執をたたん」

とあることも、よき友を浄土に送っていよいよ身にしみて知らされることである。

あとがき

正月の「朝日」の天声人語に「近頃物が豊富になって、人々の目が物から心に向き、わかり易い宗教書がよく読まれはじめた」とあった。

孔子は「衣食たりて礼節を知る」と云っているが、これも敗戦後の難儀をした人々にはうなづけるけれど、さて最近のように豊富になると「衣食足りて倦怠におちる」と皮肉を云う人もある。とも角も物は大切であるが、ありさえすればすべて満足というものではない、そこに近頃の人々の動きが変ったのであろう。試行錯誤という言葉がよく聞かされるが、やりそこなってはやりなおし、〳〵を続けるものであろう。ただこうした身に、近角常音先生がよく仰言った。

やりそこない、またやりそこない

それだからお呆れないお慈悲でないか

が唯一の支えでありいのちであると知らされます。

○

白井先生から、近角常観先生がいつもくりかえしてお話下さった譬喩をあたらしく知らせて頂き、よき道しるべとさせて頂きました。

菅瀬先生の信仰と生涯は近く京都の百華苑から出版せられるはこびになりました。

岡山在住の西本清人様の念力によります。愛別のかなしみの多い時、本月号で先生の徹底した慰問のこころを仰ぎましょう。

山本晋道師は南無阿弥陀仏のこころを真正面かお示し下さっていますので皆様も御一緒にと念じて頂きました。

木村無相さんは年末から五体不調で京都日赤病院に入院精密検査をうけられましたら糖尿病とのこと。これも難儀な病気ですが、二十日頃退院して養生せられる由です。入院中に念仏詩抄を整理されて十五日には文昌堂に草稿を渡された由、よき一里塚が出来ますことでしょう。

本年は聖人の八百年生誕祭と立教開宗の七百五十年記念の行事が盛大に行われることですが、その中で、西本願寺から宮地廓慧さんの解説つきの歎異抄の発行が人々の注意を払っているとの由です。有縁の会社では新入社員に渡し精読をすすめているとかで、これは嬉しい消息です。明治の中頃に西洋文化の流入によって思想の困惑をきわめた時、清沢満之師の提唱によって青年の手に本抄が開放され爾来年々に人々の心をうるおし、行方を照らす灯火となって今日にいたりました。物はゆたかになっても色々な問題は山積し、人間が孤立化し、疎外化される時、確かな立脚地を本抄から得させて頂きたいものです。

御案内

○毎月第一、二、三日曜、午后一時半
一道会例会
市電、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、左入ル二軒目。南区駈上町二ノ八八
一道会館。

○毎月二十四日、午前、午后。昭和区小桜町、教西寺法話会。
市電、御器所通り下車。
市バス、北山下車。

定価　半年　四〇〇円（送共）
　　一年　八〇〇円（送共）

編集・発行人　名古屋市南区駈上町二ノ八八
　　電話八二一局七〇三七番　花田正夫

印刷人　愛知県西加茂郡三好町大字福谷　吉野穂志郎

発行所　名古屋市南区駈上町二ノ八八　慈光社
振替口座　名古屋一〇四七〇番

慈光第二十五巻第二号　昭和四十八年二月十五日発行（毎月一回・十五日発行）
昭和二十四年七月二十三日第三種郵便物認可